

親鸞さま、なぜお念仏なの？ - 出会おう、語ろう、今ここで -

親鸞聖人のご生涯(4)

藤谷知道

弾圧の兆し

法然上人のもとでの歓びの日々も長くは続きませんでした。旧仏教側は念仏の勢いに恐れをなし、専修念仏は邪教であると言いがかりをつけてきたのです。

それに対して法然上人は、門下の者に自戒を求める「七ヶ条の制誡」を作り、天台座主・真性に「起請文」を送って叡山の怒りを鎮めようとした。

こうした努力の甲斐もなく念仏停止の要求は南都も包みこんだ旧仏教界あげてのものになっていきました。南都北嶺の八宗を代表して解脱貞慶が起草した「興福寺奏状」は以下のように「九箇条の失」をあげて念仏停止を朝廷に迫るものでした。

- 第一 新宗を立てる失
- 第二 新像を図する失
- 第三 積尊を軽んずる失

第四 万善を妨ぐる失

第五 靈神に背く失

第六 浄土に暗き失

第七 念仏を誤る失

第八 積衆を損ずる失

第九 国土を乱す失

朝廷は「一部の偏執の輩」で済ませようとしたが、ささやかな出来事から事態は思いがけぬ方向に展開していったのでした。

承元の法難

建永元年12月、後鳥羽上皇が熊野詣で留守の間に、院の御所の女房たちが住蓮房・安楽房らの念仏会に参加し、夜も泊まったという噂が流れま

した。後鳥羽上皇は怒りを爆発させ、承元年(一一〇七)2月、住蓮房ら四人が死罪に、また、法然上人はじめ八人が流罪に処せられることになりました。このとき、法然上人

は藤井元彦の罪名で土佐の国へ、親鸞聖人は藤井善信の罪名で越後の国へ流罪となりました。

流罪の意味

聖人は藤原一門に属する日野家に生まれました。出家した比叡の山では「官僧」として身分を保障されていました。

山を下り、法然上人門下になっても、信心一異の諍論などから窺えることは教理的な課題です。「心」の上では凡夫のつもりでも、「身(深層意識)」

はなおエリートであり知識人であったのではないでしょう。か。「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」

「『唯信鈔文意』』という地平は、流罪による生活から切り開かれたに違いありません。

教信沙弥の定

還俗させられ藤井善信と名告ることになった親鸞聖人は、「僧」という身分意識から解放され、文字通り肉食妻帯の在家生活者となりました。覚

如上人の書かれた『改邪鈔』には、聖人が「つねの御持言」として「われはこれ賀古の教信沙弥の定なり」と言われていたと記されています。

教信沙弥とは奈良時代後期から平安時代にかけて活躍し

た念仏聖です。はじめは興福寺で学びましたが、後に隠遁して播磨国賀古駅の近くに草庵を結び、妻帯し子をもうけ、荷役などしながら道行く人々に念仏を勧めた妙好人です。

われら

聖人には「群生海」とか「群萌」とかという言葉があります。また、親鸞聖人の御遺言と言われてきた「御臨末の御書」には「あをくさ人」という言葉がのこされています。

次々と子供を授かり、妻子を通して村人と生活を共にしていく中で生まれ出てきた感覚でありましょう。こうしたのちに対する愛おしみがあつてはじめて、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」という共感も生まれ出てきたのでありましょうし、さらには、そうした者こそ如来の正機であるという確信を深めることが出来たのだと思います。

「愚禿親鸞」の誕生

『歎異抄』には、流罪の記録の後に、「親鸞、僧儀を改めて、俗名を賜ふ。よつて僧にあらず俗にあらず、しかるあひだ「禿」の字をもつて姓となして、… 流罪以後、愚禿親鸞と書かしたまふなり」(『聖典六四二頁』)とあります。法然上人のもとにおいて名告っていた「善信」の名をあらためて「愚禿親鸞」と名告り

をあげるように、そんな歩みが見え、流罪の日々であつたのではないではないでしょうか。

第九回

親鸞聖人のご生涯(6)

藤谷知道

未定

藤谷純子

10月13日午後1時半



念仏生活を妙好人に学ぶ(7)

### 藤原正遠先生



藤谷純子

正遠先生は、奥様の利枝先生とともに平成五年にはじめて来寺くださいました。ちょうど庭に遊んでいた犬や猫、チャボに「こんにちは、初めまして」と挨拶をされたのには驚きました。正遠先生は平成九年に九十二歳でお浄土に還られましたので短い期間でしたが、深く心にしみるお出遇いでした。

正遠先生は、明治三十八年六月十一日福岡県甘木市の武士(黒田藩)の家系に生まれまされた。始めは医者を目指していたが、受験に失敗して浪人していたときに、よく一緒に遊んでいた園子ちゃんや脳膜炎で急死したことが縁となって、京都の山谷大学に進学した。先生は早くより死の恐迫と煩惱の醜悪さに悩まされていたからか、在学中

にお念仏申される生活が始まっていたといえます。その頃出会った和子さんのこともよく話されました。

-----

私が大学卒業近くの頃、四、五人の友達と一軒借りて自炊生活をしていました。その時、主家に、和子という九つの女の子がいた。

北海道で、両親も兄も姉も全部結核で死亡して、和子一人になるので、北海道から京都に送られてきたのである。私が四、五日の旅行から帰ってきたときには、そのおばさんが言われるのには、「和子があまりフラフラして歩くので医者連れて行ったら、両肺とも真つ黒だ。絶対安静で寝かしておきなさいとのことでした。和子は翌朝もカバンを背負って学校に行こうとするので、無理にひき止めて裏に寝かせているのです」とのことであった。和子には学校に行くだけが、ただ一つの命の綱であったのである。

私が裏の離れの和子の部屋を訪ねたら、髪は振り乱し、いつ

もなら私に「お兄ちゃん」と言うのだが、一声も出ない。まことに苦惱イッパイの様相であった。私は和子の傍らに坐って、次のように話した。

「和ちゃん、仏さまのお国から来て、ご用がすむと、また仏様のお国に帰るのですよ。仏様のお国のお母さまを「なむあみだぶつ」と申すので、さびしなかったら「お母さん、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」と申しなさいよ。これは、なむあみだぶつのお母さまのおしるしだよ」と、私は赤い房のお念珠を和子に手渡した。

翌朝、和子のところに行ったら、全く観音様のお姿であった。穏やかな微笑さえ浮かべていた。「お兄ちゃん、私は今まで「なんまんだぶつ」と言っていたんですよ。でも、その意味がわからなかったの」

その母屋は浄土宗で、時おり同行さん達が集まって声高に輪を作って繰り念仏をするのである。その声が和子の耳に入って、苦しまぎれにお念仏していたの

である。それから四、五日して和子は死んだ。(略)

小さな木箱に入れて、私も火葬場に行った。帰りの車の中で、私は和子のお骨箱を私の膝の上に抱いてきた。その和子のお骨箱のぬくみが、今でも私の心にしみじみと伝わってくるのである。

-----

先生はこの和子さんを「私の第一の善知識」と言い、はじめにお念仏のお話をして同信してくれた人と言っている。先生のこのやさしいお話に、私のはじめにお会いしたときに聞かせてくださった「大宇宙が大悲の南無阿弥陀仏のお六字となって、万物の御親と成って、私の口を割って撰取してくださるのです」というお言葉が思い出されます。

○

#### 分からぬから南無阿弥陀仏

#### 助けがないから南無阿弥陀仏

#### 親も兄弟も間に合わぬから南無阿弥陀仏

#### 自分の心も体も間に合わぬから南無阿弥陀仏

#### 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏も間に合わぬから南無阿弥陀仏  
そうなったらすべてがお恵み、お恵みのまんまん中  
南無阿弥陀仏

○

正遠先生のこのお言葉、この境地は、『歎異抄』第九章の、「お念仏を申しても喜びがありません、またお浄土へ参りたい心にならず、この世の幸せを願う心ばかりです」と苦衷を親鸞聖人に申し上げた唯円さんと、「私も、おまえと全く同じ身だからこそ本願がたのしい」と言われた聖人の場面を思い出します。

とにかく先生は、苦悩のある人には「お念仏が近くなりましなね」とにこにこしておっしゃいます。そしてまた「お念仏が称えられますか」とおたずねになり、まだ称えられない人には、「藤原のお願いですから、心の行き場所を失ったら、お念仏を称えてくださいと手を合わせて私はお願ひいたします」とおっしゃってのお念仏を手渡してください。